

総合図書館を拠点とした子どもの読書活動支援について

I 寒川町教育振興基本計画における子どもの読書活動についての現状と課題

寒川町教育委員会では、第2次教育振興基本計画における施策を検討するにあたって、まず前計画の総括として、第1次計画の各施策における現状と課題について検討を行い、次のように総括しました。

学校教育

読書活動の推進

- 情報通信技術（ICT）を利用する時間が増加し、あらゆる分野の多様な情報に触れることがますます容易になる一方で、子どもたちの活字離れが年々深刻化していると考えられています。子どもたちの視覚的な情報と言葉の結び付きが輝北になり、知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構造や内容を的確に捉えたりしながら読み解くことが少なくなっているとの指摘もあります。新学習指導要領等において、読書は、精査した情報を基に自分の考えを形成し表現するなどの「新しい時代に必要となる資質・能力」を育むことに資するという点からも、その重要性が高まっています。
- 子どもたちは、読書を通じて、読解力や想像力、思考力、表現力等を養うとともに、多くの知識を得たり、多様な文化を理解したりすることができるようになります。また、文学作品に加え、自然科学・社会科学関係の書籍や新聞、図鑑等の資料を読み深めることを通じて、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得し、さらなる探求心や心理を求める態度が培われます。さらに、読書は、人間性を培う上で非常に有益であるとともに、読書と学力の相関関係には強いものがあります。
- 国語の時間に本の紹介をしたり朝読書の時間を取り入れたりすることで、本に対する興味・関心は高まっており、読書の時間は増加しています。読書指導員の努力、朝読書の取り組み、図書室の蔵書数増など、一定の成果が表れてきています。今後も、読書活動を取り巻く情勢の変化や子ども達の読書活動の状況を踏まえ、読書活動に積極的に取り組むとともに、読みたい本がすぐ手に取れるとともに、多角的な視点につながるよう、様々なジャンルの本に触れられる環境のさらなる整備、家庭と連携した読書の推進に取り組む必要があります。

社会教育

社会の持続的発展のための学びの推進

- 総合図書館は町民の学びを支える地域の情報拠点であり、資料の充実と利用環境の整備が必要です。学習活動や情報発信の機能を高め、地域、学校、企業など多様な主体との連携や、町民が身につけた知識や経験を生かせるようボランティア活動の充実など、地域に開かれた魅力ある図書館となることが重要です。

多様化する家庭環境に対して、地域全体での家庭教育の支援

- 子どもの読書活動については、幼児期からの読書習慣の定着が課題であり、読書環境の整備と読書機会の充実を図る必要があります。ブックスタートや、公民館が学校での読み聞かせ活動と連携しながら、図書館が中心となり読み聞かせボランティアの育成を促進する取組が必要です。

2 図書館を拠点とした学習活動支援についての提案

- 学校教育では「主体的・対話的で深い学び*」を重視する流れがあるが、学校だけではなく、図書館の果たす役割も非常に大きいと考える。図書館でも、そのようなところを充実、強化していただきたい。

*小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領で、子供が「どのように学ぶか」の姿として示された。中央教育審議会答申(2016年12月)では『まず学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるか」という観点から、育成を目指す資質・能力を整理する必要がある。その上で、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶか」という、子供たちの具体的な学びを考えながら構成していく必要がある』と述べている。

- 学校と連携した取組の充実について、新しい学習指導要領が全面改訂され、教科によっては学習内容や単元構成などが変更された部分も少なくない。町立小・中学校での具体的な学習内容などを意識した蔵書構成や選書をより進めていくことが必要ではないかと感じる。既に実施されているかもしれないが、必要と思われる参考図書を学校側から挙げてもらっても良いのではないかと思う。
- 小・中学校の教科書に出てくる国語の「物語」や理科の「観察記事」などは短くされていたり、言い回しを換えられていたり、原文と異なることがある。総合図書館で原文、原書を紹介できるとよい。
- 学習室で大学のオンライン授業なども受けられるようにフリーWi-Fiサービスや、ゆったり閲覧できる座席など学習環境があるとよい。授業で学んだことをその場で調べられる利点もある。

3 子どもの読書活動推進に関わる総合図書館のイベントについて

(1) 子ども読書推進事業への提案

- 「子どもに読書や図書館に来ることを楽しんでもらう」ということが大切。今、実施している講座やイベントに参加した子が“また来たい”と思ってくれるように、ジュニア司書講座への参加をすすめるなど、次に続く企画のシステムが展開できるといい。
- 事業実績を数字で表すことは重要だと思うが、参加や利用した人の満足度が高いこともイベントの実績として盛り込めると良い。
- 「図書館職員のお仕事体験」のような企画があれば、関心のある子はいるのでないか。
- 絵本や小説の作家の追悼展示はとても良い。
- 中学生・高校生は学習席などの利用は多いが、図書貸出など読書目的のための利用は少ないことから、中学生・高校生が図書館に魅力を感じる企画が充実されるとよい。

(2) ジュニア司書の育成への提案

ジュニア司書講座は、子どもが図書館の仕事に触れながら、司書の仕事や図書館の仕組みを理解し、図書館の効率的利用方法や本を人に紹介するスキルを身につけることによって、人と本を結びつける読書推進のリーダー役として地域で活躍できるよう育成することを目的とした事業です。講座と実習に参加した後にジュニア司書の認定を行います。平成28年度に寒川総合図書館が県内で初めて実施しました。

講座は小学校高学年から中学生までの児童生徒を対象に、これまで平成28年度、30年度、令和2年度に実施しました。ジュニア司書認定者による活動は概ね毎月実施していますが、学年が上がることにより、活動卒業となるため、現在活動できる認定者が少なくなってきています。

【課題1_子どもの成長過程、発達段階を踏まえた内容となっているか】

改善提案1:講座への募集対象は小学生とし、認定後の活動参加は中学生まで継続可能とする。

- ジュニア司書だけでなく、どのイベントでも小学生と一緒に中学生までというのは難しく、たいてい中学生の応募意欲が下がる。講座の募集では対象から中学生を外して、小学4~6年生もしくは3~6年生として、ジュニア司書活動への関心が続けば、中学生になっても活動を継続できると考える。
- 中学生は広報を見ている層ではなく、親から町のイベントについて説明を聞く年齢でもない。友達同士のつながりがあれば行く場合もあるので、学校を通じて周知するなど、中学生を募集するにはかなり工夫と努力が必要。
- 中学生の部活動によっては夏休みも忙しい。ただし、あまり活動のない部もあるので、そのあたりに向けて呼びかけるという方法は有効かもしれない。
- 低学年の子にいきなり難しいことをさせるのではなく、できることを広げるように学年にあわせて段階的に育成する。ジュニア司書として中学生になっても続けられるといい。
- 最初から、小さい子にも全部把握させようとするには範囲が広すぎるが、異年齢で一緒にやるのであれば、この学年はこの範囲と段階的に作業を分けて、次の年にはあれができるようになると長い目で見られるといい。
- 小さい子はお兄さん、お姉さんの姿を見習ってやることは好きなので、上の学年になればあれができるのだと思うと、低学年でもがんばってみようという気持ちになるかもしれない。続ければ最終的にはジュニアリーダーのような存在になれる。
- 広報や周知の工夫として、ジュニア司書の先輩のコメントを載せたチラシなどがあると、関心のある子ども達に繋げていけるのではないか。
- 募集にあたり、各学校の図書委員に声掛けをする。

【課題2_子どもの関心事に応じた内容となっているか】

改善提案2:講座参加者を募集する時に、ジュニア司書の活動内容をわかりやすく明記する。

- 募集をする時に、講座内容にジュニア司書はイベントのお手伝いや書架整理などの活動もできることを入れた方がよい。本が好きで応募する子だけでなく、イベントのお手伝いが好きな子、ひたすら書架整理をやりたい子もいる。詳しい活動内容がわかれば、参加者が増えるのではないかな。
- 中学生は夏休みも部活動などで忙しいため、行きたいと思っても夏休み期間中に複数日参加することは難しいと思われる。1~3月など別の時期にも募集する方法も考えられるのではないかな。
- 参加できない回があった場合は、オンライン参加やハイブリット式など柔軟に検討してはどうか。

【課題3_司書の業務を教えることに着目するか】

改善提案3:講座の目的は読書活動推進や図書館への来館促進をする読書リーダーの育成とする。

- ジュニア司書講座の趣旨は司書の業務を覚えることを目的とするのではなく、子どもに読書や図書館に来ることを楽しんでもらう子ども読書リーダーになってもらいたいと考える。参加が増えるように募集内容の工夫や、ジュニア司書認定者が継続して活動が定着させるためには、主催者側の図書館スタッフだけではなく、保護者や地域の大人の立場といった視点や意見を取り入れた事業企画も必要である。
- 夏休み時期だけの募集や研修といった短期集中型ではなく、1年かけて計画して、途中から参加してもジュニア司書の項目が習得できるように、柔軟に長い目で育てる方法もあるのではないかな。

【課題4_ジュニア司書の名称に認知度はあるか】

改善提案4:図書館の外へ「ジュニア司書」の認知を高める取り組みを行う。

- ジュニア司書という名前が聞きなれないところもあると思う。認知度が上がれば、学校外活動としての部活のように評価されれば参加の動機付けになるかもしれない。学校の協力も得られるように声をひろっていくことも必要。
- 図書館スタッフが学校に出向いてジュニア司書や子どもの読書活動事業のアプローチを行う。中学生向けに総合図書館からブックトークの派遣を行うなど、楽しく本の紹介をしてもらうことで、読書への興味が深まるのではないかな。